

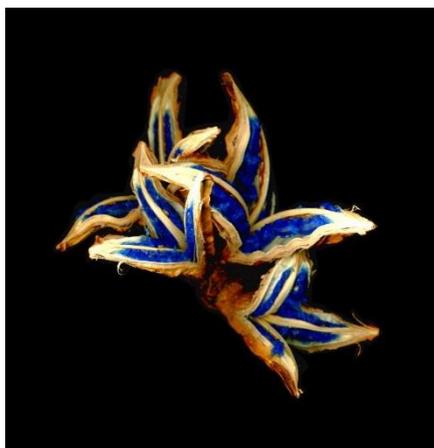
鹿児島の植物 73

個性的な「たね」

植物担当 久保 紘史郎

「たね」によって色や形は様々で、変わった性質を持つものもあります。その中でも特に個性的な「たね」を紹介します。

タビビトノキ（ゴクラクチョウカ科）



色鮮やかで、ひときわ目を引くのがこのタビビトノキの「たね」。まるで宝石のような、青色をしています。アフリカのマダガスカルが原産です。名前の由来は、旅人が葉にたまった水から、飲み水を得たためとも、葉が東西方向に扇状に開き方位を知ることができるからとも言われています。

バンクシア（ヤマモガシ科）



山火事が起こった時だけに、「たね」をまく変わった植物です。自然発火によって、山火事が頻発する、オーストラリアの乾燥地域に生育しています。山火事の際に「たね」をまくことで、ライバルの植物がいなくなり、光がよく当たる好条件を独占して、次の世代を残すことができます。

オオミヤシ（ヤシ科）



世界最大の「たね」として、ギネスブックに掲載されています。大きいものでは重さが 30 kg ほどにもなります。大きくて重いため、海流に乗って遠くに運ばれることはできません。そのため、セーシェル共和国の 2 つの島にだけ自生しています。

ハス（ハス科）



蜂の巣状の器(果床)に、たくさんの「たね」が詰まっています。この様子から蜂巣がハスの語源になっています。ハスの「たね」は非常に長い年月が経っても発芽することができます。2000 年前の遺跡から見つかった「たね」が発芽した例もあります。